

求められる資質・能力と「人間性に向かう学び」

—伝記教材の「テキスト形式」と新たな価値の創造—

愛知教育大学教職大学院 佐藤 洋一

一 なぜ、 “ 深く人間的な学び ” と伝記教材の活用…だったのか (第二回大会の問題提起)。

昨年度二〇一五年度公開研究会の大会テーマは、小学校物語教材「大造じいさんとがん」の模擬授業をめぐり討議で深めるもので、「物語の『学び合い』でどんな学力を高めるのか?—二一世紀を生きる子どもたちにつける資質・能力と評価—」であった(詳細な記録、論考は『研究紀要・創刊号』二〇一六年、参照)。

第二回大会テーマは「 “ 深く人間的な学び ” を創るこれからの授業と評価—求められる資質・能力と伝記教材の活用—」、教材は模擬授業提案者が使用している教科書教材である「手塚治虫」(小五東書)・「伊能忠敬」(小六教出)二つに限定した(注1)。伝記教材(広義のノンフィクション)には、他に「百年後のふるさとを守る」(小五光村)、「宮澤賢治」(小六光村、東書)、「金子みすゞ」(小六教出)の他、緒方洪庵、星野道夫、マザー・テレサ、オードリー・ヘップバーン、長倉洋海等による報道写真と世界の今等がある。

研究会のキーワードは「深い学び(質的に高い学び)、創造的・論理的思考(論理性、批評性)、表現力(多様なテキスト形式・構成と表現の評価)、伝記教材(ノンフィクション)、資質・能力(キー・コンピテンシー)、授業、パフォーマンス評価、ルーブリック等」であった(研究会会員にも連絡)。なお、今回のテーマ設定の意図、期待される論点等については「第六部 二一世紀型教育研究会 二〇一六年度公開研究会の概要(五頁)」に整理しているので省略させていただく。御参照くだされば幸いです。

二 新学習指導要領と「創造性・深い学び」「主体的な学び」「深い学び」の実現と実践課題

1、新たな時代・価値観に対応した資質・能力育成のポイント

「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」（二〇一六年八月二十六日・中教審教育課程部会）では、『深い学び』の実現に向け（略）、子供自身が（略）創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要」とされている。さらに『主体的な学び』の実現に向け（略）、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなど（略）特に、学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要」との指摘がある（「学習・指導の改善充実や教育環境の充実等」。これ等は「答申」「改訂案」、新指導要領にも引き継がれている。下線部は佐藤による、以下同じ。注2）。

新たな時代・価値観に対応した資質・能力育成をめざす新学習指導要領の中で、とりわけ重視されていることは何か。私見では「習得・活用・探究」の学習過程・伝統文化の尊重と継承等（教育基本法・学校教育法他）を踏まえた、いわゆる「論理性を踏まえた創造性（新たな価値観や生き方の創造や提案、洞察力や批評性）」、「質的に深い（人間的本質的）な学び」への指向性である。さらにこうしたいわゆる「深い人間的な学び（創造性、批評性）」を的確に見取り評価する、メタ認知化していくためのパフォーマンス課題・評価（論述、議論や討論、提案。批評・鑑賞等）、ルーブリック開発の新たな課題とみることができ（注3）。

2、「要」としての国語科学習・学びの再構築へ（総則）

これ等は解のない、複雑多様な価値観や情報の時代をたくましく生き抜くために不可欠な資質・能力（リジリエンスや自己制御、共感能力等の非認知的能力を含む）の育成にも関る実践課題である。国語科は資質・能力や

言語能力等、全て活動の基盤で中核となる教科である(注4)。学習過程・振り返り(メタ認知化)における「主体的な学び」「考えの形成と深化」「学びに向かう力(人間性等)」等全てを一貫して貫くベースになっている。

そのため、論理的思考を踏まえた「創造的・批評的な学び」、学び自体をメタ認知化、評価(批評)できる学習、全員に保証すべき基礎・基本(習得)・他者と協働的・対話的に関わるためのコミュニケーション能力の再考、自己の在り方生き方に関わる価値観を形成する「思考・判断・表現力等」の育成(活用)、そして学びの「質的評価観」の系統性の検証等の質的な再構築が明示されていると読むことができる。

三 新たな価値を創造する情報リテラシー多様なテキスト形式と伝記教材―

1、伝記教材―考えの形成と深化、価値ある生き方の創造へ―

第四次産業革命・グローバル化社会が進行する現代、多様で膨大な「情報」から必要な価値ある情報を選択し、知識や経験・感情(立場や専門性)との関連性から統合・構造化したり、既有的知識・技能等の構造転換等を通し、新たな意味を持つ「自分の考え」を形成・深化する学びの方略・情報リテラシーを指導する必要がある。これは自分らしい「生き方」を主体的・対話的(協働的)に創造していくための教育課題一つである。

こうした教育的課題の突破口ともなるのが「自分の考え」を形成・深化し、「生き方」を創造する伝記教材の「テキスト形式」を生かした授業開発の視点である。また、各教科等の言語活動で観察・実験・レポート作成、論述等の知識・技能の活用を図ったり、記録・要約・説明・論述等の学習活動に取り組む必要が強調されている。

しかしこれ等と、全教科・領域等のベースとなる国語科における記録・引用・要約・メモ・説明・レポート(論文)作成・論述・批評(評価)といった「多様なテキスト形式(習得型、活用・複合型)」との関係性が極めて不明瞭である。教材の本質に即した作品形式・構成・ジャンル(多様なテキスト形式)の位置づけと説明は何をもたらずか。簡潔に述べると、(1) 国語科学習の本質的な学びの意義と言語能力(言語活動)の系統性(報告・鑑

賞・批評、随筆、詩歌等)、(2)他教科等での学びへの教科横断性(汎用性)等の明確化、(3)教材が変わっても既習の「テキスト形式」での学びを活かし他教材・領域、情報形式等の解釈・批評、活用に活かせる、(4)習得型の基礎・基本のテキスト形式(構成)と活用・複合型テキストの関連性の整理で教室での学びを実生活や現代的情報リテラシーへの対応等が可能となる(注5)。

2、伝記教材による「勇者」の発見、批評的リテラシー

伝記は小学校中学年以降の児童生徒が喜んで読む「テキスト形式」の一つであり、前学習指導要領の小学校五年生・六年生の「言語活動例」でも「伝記を読み、自分の生き方について考える」という項目が明示され各社で教材化されてきている。小中学校の国語科教材として「マザー・テレサ」「宮沢賢治」「田中正造」「緒方洪庵」「手塚治虫」「伊能忠敬」「金子みすゞ」等を取り上げた伝記教材が数多い(高校英語科でも扱われている)。

しかしこれらは伝記テキスト形式論や批評の方法(習得・活用・探究)についての系統的な位置付けや評価観から提案・検証されてきたとは言えない現状がある。伝記教材を活用することで、偉大な業績を残し人類の未来に貢献した人物だけでなく、身近な家族や無名の人物等の生き方の中に、「人生の苦難に、勇氣と知恵をもってどう向き合ったか」「人生の転機にいかん決断して、自分の人生を切り開いていったか」等(「勇者」の発見)を、自分の立場から主体的・批評的(対話的)に読み解く方法を学び、こうした人々の生き方や判断・行動について「自分の考え」を形成し、今後の自らの生き方の創造と関連させて指導していくことが、国語科の重要な学びであり、こうした観点からの新たな伝記教材の教材開発、授業・評価開発が求められている(注6)

3、伝記教材の「テキスト形式」を生かした授業開発

伝記(教材)というテキストは、事実のある立場から記した記録・論証の文体としての論理的な文章と、筆者独自の感性や認識による語りや描写としての文学的文章の二つの「テキスト形式」を併せもった「活用・複合(探究)型」のテキスト形式」と言うことができる。いわゆる伝記(評伝・史伝・自伝等を含む)は記録・報告者によ

って選択されたある特定の人物の生涯・事実を、(1) 出生から死までの記録、(2) 生きた証・価値(歴史的・文化的・国家的、時代・制度的)の論述、(3) 時系列や幾つかの特徴的なエピソードの選択・構成、解釈(意味付け)で記述、(4) 選択された人物の業績や人柄・人間性等を記録・論証するもの(筆者による今日的な意義の提案。論証)とみることが出来る(5) 文体・構成の特徴は記録の文体としての論理的な形式・構成をもち業績や人柄・人間性等についての「筆者の発見と認識、主張(メッセージ)」を筆者独自の文体で語られる(構成・語り・描写・エピソード選択と記述、象徴的なイメージの活用、読者意識からの工夫と配慮等)。

4、「テキスト形式」を生かした伝記教材の学び方(批評的リテラシー)——〇〇のポイント——

伝記の「テキスト形式」特有の学び方として、本稿では以下の一〇のポイントとして整理した。(1) 人物が生きた時代背景を知る(時代状況と価値観・生き方)。(2) 筆者の主張・メッセージを読み取る(論旨の理解から構成へ)。(3) 筆者の主張・メッセージの背景にある「時代的な価値観・常識的な考え方」を理解する(人物の個性、行動と生き方)。(4) 人物の設定を読み取る(出生と死、職業・生涯…)。(5) 選ばれた「エピソードの数と内容」を読み取る。(6) 選ばれた「表や図、写真等の資料」を読み取る。(7) 自分の立場や興味・関心から「自分の考え」をもつ。(8) 自分で選んだ人物について、伝記の「テキスト形式」を生かして論理的に構成する(歴史的、身近な人物…)。(9) 発表・交流でさらに「自分の考え」を形成・深め、生き方・物の見方や考え方に生かす(対話的・協働的)。(10) 伝記の「テキスト形式」の学び方をメタ評価する(注6)。

四 より良い「生き方」や価値観を創造することへ……

これからの学校教育で重要となるのは全教科・領域や活動のベースに「学びに向かう力(主体性)、人間性等(深い学び)」があるということである。学習活動を通してどのように社会や世界と関わり、どう主体的によりよい人生を送るか等、児童生徒の「生き方」や価値観の更新に直結する「深い人間的な学び」につなげる。言語活

動ありきの学習ではなく、教科内容の本質的で原理的な魅力を引き出す「学び方」（教科固有の見方・考え方、深い学び）、伝記教材であれば筆者の戦略とともに、対象となつてゐる人物の生き方とその価値を読み取り、深い人間性や英知等に気付かせるような「学び方」を習得させ、評価していかねばならない。

1、「主体的・深い学び」と学習システムの確立―学習過程・単元構想の改善―（注3）

「主体的」課題解決的な学びや探究的な「深い学び」を実現させるためには、確かな「習得」から「活用」「探究」への学習システムを確立し、各学習段階における目標の到達度をメタ評価させながらステップアップしていく必要がある。特に、全員が本質的で汎用性の高い「教科・情報の学び型（方略）」が分かり、「多様なテキスト形式」や情報内容を正確に読み取る「習得」段階、一人一人が明確に「自分の考え」をもち、自分の立場・関心・課題意識から発信・交流・学び合いをする対話的・協働的な「活用」「探究」段階の充実が必要である。

2、考えの形成・深化とステップ―正確な理解から解釈・判断（分析・考察）、言語化の方略―

全員の児童生徒達に考えの形成・深化をさせるためにはとステップが必要である。ここでは考えの形成・深化にレベルを想定した。例えば以下のようなものが考えられる。（1）「習得1・基礎学習」。既習の学習や経験から考え・意見をもてる。（2）「習得2・基本学習」。教科の本質的な学び・方法、文章や地図、年表、画像等を読み取り解釈や意見、疑問をもてる。（3）「活用1・考えや意見を持つ（書いてまとめる）」。自分の立場から情報に対する解釈・判断を持ち言語化できる。（4）「活用2・対話的協働的学び」。異なる立場の情報に対する自分の考えや意見、疑問点や質問をもち学びを深化させる。（5）「探究」。学習を振り返り自分らしい「生き方」や価値観のとらえ直し、今後の学びの課題等について自分の考えをもつことができる。

このように情報の論理的な構成・発信、交流・学び合いモデルの「習得」から「活用」「探究」へのステップで児童達自身がどのような考えを、どうもてばよいのかを目に見える形で示していく必要がある。

3、言語・非言語情報の関係を読み解く

伝記「テキスト形式」では、年表や地図等の非言語情報も言語情報と同様重要である。言語とデータ・グラフ・図・画像・年表等との関係を正確に読み解き、論理的で説得力があり記録・報告・プレゼンテーション等に非言語情報選択の意図や効果を明確にして活用・探究（創造・評価、改善）していく力を育てる必要がある。

4、学びの質と深まりを「メタ認知」——パフォーマンス課題とルーブリック（注6・7）

多様な文脈に応じた「テキスト形式」による学びの横断的汎用性を重視するために、到達目標に対応した振りの新たな視点の再構築が必要となる。一例として、評価レベル（ルーブリック的視点）を以下の六項目設定した。これらの項目を活用し児童が学んだことを新たな発想や認識・価値観の形成に生かす方法を明示した。

（1）〈意欲・主体性レベル〉伝記教材で学ぶことの楽しさ、魅力を知る。（2）〈知識・技能、理解レベル〉伝記教材の「テキスト形式」の学び方が分かる（本質的問い）。（3）〈思考・判断・表現等レベル〉自分の立場や関心から「自分の考え・解釈」をもつ。（4）〈表現・判断・構成、発信レベル〉選択した人物の生きた時代背景・生き方・価値観を選択・構成し伝える。（5）〈対話的・協働的、交流レベル〉他者との発表交流でさらに自分の考えを再形成、自分の生き方・物の見方や考え方を深化させる。（6）〈メタ認知化・主体性、深い学びレベル〉学びの内容や方法、発見等を自己の生き方や価値観、学習・生活、読書、人間関係等に生かす。

五 授業力・教師力とカリキュラム・マネジメント——資質・能力と「多様なテキスト形式」の解明——

二一世紀型の新しい学びや資質・能力に対応すべき多様な教材ジャンル（テキスト形式・表現）が学習指導要領で示され教材化されて久しい。一方、授業実践での混乱が多い要因として次の点が挙げられるだろう。一つは、戦後以降根強く残る形式的な文章観による教材・指導観がある（文種別指導）。また、国語科教材研究論では依然として文学的文章と論理的文章の二大別が多く、両者の特性を併せもつ、また表や図やグラフ等、非言語情報を組み合わせたいわゆる「活用・複合（探究）型」のテキスト形式」についての実践的研究、重要性への指摘も十分

に行われていない。二つ目。現行学習指導要領「解説」でも「多様なテキスト形式」についての言及が漠然としたものになっており（鑑賞・評論・批評の相違、随筆・詩歌・物語創作と評価観）、結果的に各社の教科書・手引きや指導書等でも指導方法や学びの系統性・汎用性、評価観等の記述が明らかではないことが挙げられる。

「多様なテキスト形式」を説明し授業実践に位置付けることは、文学的・論理的文章教材を系統的・汎用的に位置付け整理するという国語科授業改革につながる。さらに、各教科・道徳・ESD・情報教育（プログラミング教育）等の教育内容を踏まえた汎用的な視点で、学校・学年・教科の目標達成に必要な教育内容の組織的重点化（カリキュラム・マネジメント）を具体化するためにも重要な視点である。

以上、二〜五は第四次産業革命・グローバル化の複雑な現代をたくましく生き抜く資質・能力をいかに育成するか、「自分の考えの形成・深化」、主体的な「生き方」を創造するための教育の一つとして、伝記教材の「テキスト形式」を生かした教材開発と授業実践の在り方について論じたものである（注6）。

六 まとめ―新学習指導要領「資質・能力」育成に向き合う基礎的・基本的課題(例)―

- 1、育てるべき「資質・能力」とは何か？ いわゆる「学力」との違いを明確化しておく必要がある。
- 2、評価の三観点の運用をどうするか？特に、パフォーマンス課題と評価、ルーブリック作成等の戦略。
- 3、「主体的・対話的で深い学び」とは、要するに、何がどうなることか？教科・単元、指導案レベルで。
- 4、各教科の専門性（深い学び）と教科横断的・汎用性のつながり（道徳、特別活動、外国語…）、各教科では？「深い学び」と「見方・考え方」の関連は？
- 5、学びの質を高める…「学習過程の改善」とは？ まとめ・振り返りとメタ認知（の方略）？

例、言語活動の充実は、特に何を、どう重視するか（再構築すればいいのか…）、対話的Ⅱ学び合いか？

主体的とは… 「習得・活用・探究」の位置づけと学びの明確化…。

6、未知の課題に向かう「思考力・判断力・表現力等」（活用）、「学び向かう人間性（の涵養）」（探究）の段階では論理的に書いてまとめる過程が非常に重要（パフォーマンス課題、現状の教育でも不十分、全国的な学力テストでも）、「考えの形成、深化」「論理的・創造的判断力・表現力」を意識した授業開発と提案へ。

7、「総則」にも明記された現代的な教育課題に対応するための資質・能力（汎用的資質・能力）、特に、言語能力、課題解決能力、情報（テキスト）の分析・考察・評価；等をどう育てるか。

8、「知識・技能、汎用的スキル、態度・価値」（OECD2030）と資質・能力育成の関係、評価。

9、今までの教育や方法、評価、指導過程・単元構想と何がどう違うのか、同じなのか？ 改善のポイントは。10、それに伴い、これからの教員の実践的指導力の在り方、児童生徒・保護者、地区の方がたの期待に応える力量形成、研修の在り方、カリキュラム・マネジメント等では何がどう重要なことか？（以下、略）。

注記・主要な参考文献（一部）

1、手塚治虫・伊能忠敬関係文献（略）。佐伯彰一『日本人の自伝』（講談社学術文庫一九九一年）、武田泰淳『司馬遷史記の世界』（講談社文庫一九七二年）、アレックス・ヘイリイ『マルコムX自伝』（河出書房新社一九九三年）、モミリアーノ『伝記文学の誕生』（東海大学出版会一九八二年）、勝尾金弥『伝記児童文学のあゆみ』（ミネルバア書房一九九九年）、斎藤孝『自伝を読む』（筑摩書房二〇一四年）、『こころ 特集・自伝・評伝を愉しむ』（平凡社二〇一三年）、立川談志『手塚治虫』『私のこだわり人物伝』（日本放送出版会二〇〇五年）、等（詳細は略）。

2、『平成二八年度 答申全文』（明治図書二〇一七年）、『平成二九年度 学習指導要領全文と改訂のピンポイント（小学校・中学校）』（同）、『平成二九年度 小学校学習指導要領ポイント総整理』（東洋館書店二〇一七年）等。

3、拙稿「中学校 資質・能力を育む『学習過程』」「平成二九年度 学習指導要領の改訂のポイント（小学校・中学校 国語）」（明治図書二〇一七年四月）、佐藤洋一・森和久・有田弘樹「国語科におけるアクティブ・ラーニングの

開発と課題―『質の高い深い学び』につなげる活用型テキスト―』『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要1号』（二〇一六年）、佐藤洋一・森和久編著『子どもが楽しく、生き方と洞察力』を育む授業の提案・報告』（楽しく深い学び）を創る授業研究会編刊二〇一七年三月）、『国語科重要用語事典』（明治図書二〇一五年）等。

4、「総則」第3 教育課程の実施と学習評価「1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の（2）では「第2の2の（1）に示す言語能力育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、児童・生徒の言語活動を充実させることと記載されている（傍線佐藤）。

5、佐藤洋一「多様なテキスト（情報）の「構成・表現形式」・評価―求められる資質・能力と創造的・論理的思考・三つの側面：“多様なテキスト形式”―」第一三一回全国大学国語教育学会東京大会二〇一六年一〇月、同「批評的・創造的な学びの授業開発」第一二七回同学会筑波大会二〇一四年、同「二一世紀型授業開発と国語科『活用型テキスト形式』」第一二八回同学会兵庫大会二〇一五年等、佐藤編著「国語科『習得・活用型学力』開発と授業モデル4 伝記・ノンフィクション編」（明治図書二〇一一年）等参照。

6、佐藤洋一・左近妙子『深い人間的な学び』を創造する伝記教材の授業―『杉原千畝』（開発教材）と向き合う小学六年生―』『愛知教育大学研究紀要 第六六輯（教育科学編）』二〇一七年三月）。本稿の二〜五の部分は当紀要の一部を本稿の趣旨に沿って再構成、追記したものである。

7、佐藤洋一・有田 弘樹『創造的・論理的思考』を鍛える二一世紀型教育―「故郷」（小説教材・中学三年）におけるパフォーマンス評価・メタ認知―』『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要2号』（二〇一七年）、佐藤洋一「これからの学び・教育の何を、どう創るのか」『二一世紀型教育研究―新しい学びを創る（創刊号）―』（二一世紀型教育研究会編著二〇一六年）等。